

リサーチ・プロジェクトとしての生命美学

「生命美学」展（早稲田大学理工学術院アーティスト・イン・レジデンス研究発表展）

会 期：2012年10月18日（木）～27日（土）

会 場：早稲田大学西早稲田キャンパス63号館1F

出品者：レジデンスmetaPhorest メンバー（石川智章、石橋友也、井上恵美子、岩崎秀雄、中村恭子、堀江俊行、Juan M. Castro、BCL（福原志保+Georg Tremmel））

秋庭 史典

metaPhorest（メタフォレスト）は、早稲田大学先端生命医科学研究施設の基礎生命科学系研究室内に2007年から設置されている、アーティスト・イン・レジデンスを通じた「生命美学」の研究・制作プラットフォームの名称である。このプラットフォームに、「生命とは何か？」という問いに関心を持つアーティスト・表現者が、1年以上に亘って滞在し、生命科学研究の現場で、実験設備やセミナーなどを科学者と共有しながら探究してきた成果が、今回の展示である。

以下、この展示について相互に関連する次の二点から手短かに考察しながら、幾つかの展示物にごく簡単に触れることにする。ひとつは、タイトルの「生命美学」について。もうひとつは、これが「研究発表展」であることの意義についてである。

まず、本展の名称が、生命科学与芸術とのつながりから連想される、“バイオアート”展ではなく「生命美学」なのはなぜか考える。ひとつの理由は、本展出品作の多様性にあると推察される。バタイユの思想・多自然主義的自然観・アイヌの熊祭りに関する人類学的研究等を援用しながら、「捌く」という行為における美の切開・生死の反転を紙本彩色で描く中村恭子《牙截図》・《蟹盃図》、また第5回AACサウンドパフォーマンス道場優秀賞作品で、一定速度に見える身体運動のズレを増幅してその動作主に送り返すことで意識と身体運動の双方がなしくずし的に遷移させられてしまうさまを、それでも木魚を叩き続ける演者自らの身体的苦悶を通して見せる堀江俊行作《ずれ木魚》などは、バイオアートという枠組みにはおさまりそうにない痙攣的衝撃をもたらす作品である（血流などの生体情報を可視化・可聴化して環境的に配置してみました、といった作品との違い

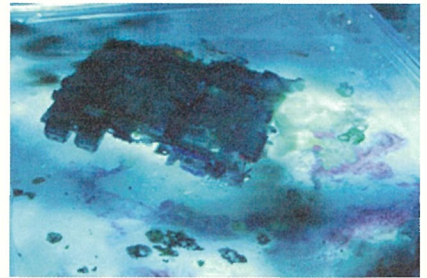
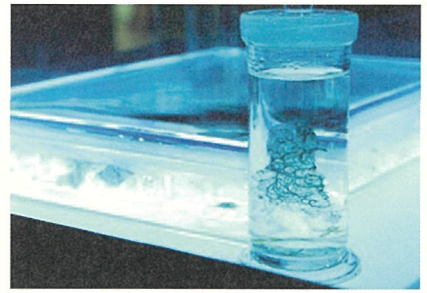
を考えるとよい）。

では、石橋友也《金魚解放運動》（以下《金魚》）はどうか。《金魚》は、「キンギョを逆品種改良によってフナに近い形に戻す」ことで「野生に解き放つ」試みとされる。水槽が二段に並べられ、上段で親（父と母）、下段でそれらの人工授精により作出された第一世代が泳ぐ。第一世代は、親のもつ赤く輝く体色も、目やコブという豪華な装飾も持たない、フナ色の個体である。その対比は観る者に鮮やかな印象を残す。けれどもわたしは、これをバイオアートと呼ぶことにも躊躇を感じる。これは既存のバイオテクノロジーを応用して設えられた感性的表象でもなければ、アートという手法を借りて行われるバイオテクノロジー批判でもない。そうではなく、「フナ・キンギョ・そこに介入してきた人間」の三者、そのいずれが主役ともつかない（なので「解放」は両義的である）相互作用の考察は、18世紀の「美しい技術（芸術）」の試みを正面から引き受け直したものとさえ考えられる。その試みとは、最小限の人為の投入により自然の相互作用を引き出し、自然との共生を図る試みである。そして、この試みを通じて自分たちの生き方を考えること、これは美学の問いにはかならない。本展が「生命美学」と名づけられている理由のひとつは、ここにあると思われる。

第二に、これが「研究発表展」であることの意義を考える。注目すべきはその展示形態である。研究発表であるため、展示物についてのポスター（文テキストと種々の画像を含む）、そして発表者の解説が加わるのである。学会等で馴染みの形態のため別段不思議にも思わないかもしれないが、通常美術展と比べ、これは特筆すべきことである。科学における理論は文だけでなく図や

グラフ・写真などにより部分的・不完全に表象されている、だからこそそのいずれもが理論にとって不可欠なのだとする考え方はよく知られている(戸田山2005)。しかし、美術展の側から、展示物は科学理論ではない、だからポスターや解説は不要だと言う人もいるだろう。けれども近年、Chakravartyのように、科学が近似的真理を扱う二つの方法(抽象化abstractionと理想化idealization¹⁾)と美術における表象の方法とを類比的に考える人もいる。彼によれば、絵画もまた、それが実在的であるのは、科学理論と同様、一方で絵画が実在システムから「抽象」した要因の数ならびに要因間の関係描写が適切であるとき、他方で実在システムを「理想化」した絵画システムが行う指示作用がシステムの利用者に理解されているときであるという。だとすれば、絵画がターゲットとし部分的に表象している実在システムは、科学理論のそれと同様、文テキストや図やグラフによっても部分的に表象が可能であり、相互に補い合うはずである。それらを並べて見せることには、したがって理由がある。本展示のように、科学理論と絵画等、複数の表象システムが競合するのであれば、なおさらだ。もちろんそれらを併置するのは、「生命」とそれに関連するさまざまな問題を、わかりやすく短時間で消化して終わりとするためではなく(もちろん問いを投げかけて煙に巻くためでもなく)、ともに更なる議論を積み重ねるためである。「研究発表展」であることは、大きな意義を有するのだ。

議論のための素材は、遠い過去から近い将来にわたって、さまざまな仕方で示されている。作品《Prototype of “Biogenic Timestamp” (On Photoautotropica)》(岩崎秀雄+オロン・カツ)で主役を演じているシアノバクテリアは、この地球を分子状酸素に富む惑星に変え、それ以前の生物を死滅させると同時にわたしたちの生きる環境を準備した張本人である(これはポスターと解説がなければわからないことだ)。その環境のなかで人類は、高速計算機が本質的役割を果たす「合成生物学synthetic biology」に至る高度な文明を築き上げた。しかしいまこの作品のなかで、その高速計算機の命であるマザーボードが、ふたたび、シアノバクテリアによって分解されている。気の遠くなるような時間が、しかし目の前に、事実として示されている(それは、ここに展示物がなければ感得されないものだ)。



《Prototype of “Biogenic Timestamp” (On Photoautotropica)》
(上2点)と「切り絵」(《metamorphost III》の部分、次項)
撮影：山本渉

生命を通してわたしたちの過去と未来を考えさせるのは、《Cultigen 9》(BCL：福原志保+Georg Tremmel)も同じだが、そこではメディア・テクノロジーの歴史と未来が、それぞれ微生物との共生を試されている。新聞、写真、フィルム、ヴァイナルレコード、磁気テープ、ハードディスク、光学ディスク、フラッシュRAMとSSD、そして、DNAと遺伝子操作されたシアノバクテリア。とりわけ最後の二つは生命データに関わるメディア・テクノロジーだが、操作されたそれとわたしたちがどのように共生していくのか。ごく近い未来からのこの問いかけは、『二母性マウスにおける生命倫理』(石川智章)において、同性である雌同士での生殖のヒトへの応用の問題としても提示されている。答えはない。そこで本展が美術展の側に引き戻されるように思われるかもしれないが、ここではそれを先端研究のゆえ、と解したい。

会場は、学内外の方が多数出入りするホールであり、設営や会期中の運営にあたって相当な苦労があったと思われる。専用スペースであれば、《Prototype of “Biogenic Timestamp”》の知的理解と、それに隣接する「切り絵」(岩崎秀雄)がもたらす「緊張」と「自由」の交錯した強靱な身体感覚との対比と深層での共鳴を、



「切り絵」
《metamorphorest III》の部分

より強く感じさせることができただろう。しかし、来訪者のあいだに広範な議論を喚起すること、そして美術展とは異なる展示の可能性を提示することが本展の目的であれば、それは十二分に達せられたのではないか。会場を訪れ、Juan M. Castroに導かれて、顕微鏡の向こうに光る繊細かつ大胆なストラクチャーに驚き、これがコレステロール(!)と有機化合物から構成された建造物で、自律的に変化し続けており、その人工的再現のためにはまだ明らかにすべきことがたくさんあるという解説に未来を感じた人は、ここにmetaPhorestという活動拠点があることの意義を理解したはずだ。

文献

Chakravartty, A. (2010), Truth and Representation in Science: Two Inspirations from Art, in R. Frigg & M. C. Hunter (eds.), *Beyond Mimesis and Convention: Representation in Art and Science*, Boston Studies in the Philosophy of Science, Springer. [http://www.nd.edu/~achakra1/downloads/frigg_hunter_book.pdf] (2012/11/02取得確認)

metaPhorest 編 (2012) 『生命美学展』 展覧会パンフレット

戸田山和久 (2005) 『科学哲学の冒険』、NHKブックス

1

抽象化は「实在システムのうちいくつかの重要なポイントだけを取り出してそれに注目すること」、理想化は「实在システムが物理的に満たすことの不可能な条件を設定し、『もしかりにその条件が成り立っていたなら、实在システムはどのようであったらうか』と考えること」(戸田山2005, pp.233-4, cf. Chakravartty, pp.6-7)。